

# 呉声西曲における双関語の構造

—— 比喩表現との比較において ——

吉田文子

## 一. はじめに

中国の古典詩歌には「楽府詩」と呼ばれる詩の形式があり、古来多くの文人たちが楽府詩の名作を残している。しかし、初期のころの楽府詩は民間に流行った歌謡を収集したものであり、そのほとんどが楽曲を伴って歌われていたものであった<sup>(1)</sup>。このような民間発の楽府は漢代を中心に数多く収集され、魏晋のころには一時途絶えたが、東晋以降の南北朝時代に至って再び大量に収集されるようになった<sup>(2)</sup>。この時に収集された南朝の民歌は『楽府詩集』の「清商曲辞」篇において「呉声歌曲」「西曲歌」として記録されている。その形式的・修辭的な特徴を挙げると、漢代の民歌には三、四、五、六、七言体が複雑に入り交じった雑言体が多いのに対し、南朝民歌のその多くは五言四句構成である。また、恋愛詩をテーマとした歌が多いことを反映して、男女の問答形式が多く見られることが挙げられる<sup>(3)</sup>。そしてもう一つの特徴としては、「双関語」、日本語でいう掛詞の使用が非常に多くみられることである。双関語については台湾では既に様々な著作が見られる。王運熙氏の「論呉声西曲与諧音双関語」<sup>(4)</sup>では呉声西曲に見られる双関語の分類がなされており、胡紅波氏の「論歌謡之『双関』義」<sup>(5)</sup>においては、双関語の範

囲や定義など、理論的な方面からの考察がなされている。また、一般的な修辞技法としての双関語を論じたものとしては黄慶萱や傅隸僕氏の修辞学のテキストが挙げられる。<sup>(6)</sup>しかし、これらの著作を詳細に読み進めていくと、その分類法や定義の仕方に対して様々な疑問を感じざるを得ない。特に比喻表現との比較において考えると、それぞれの範囲や境界線、また、実際の作品中における両者の関わりについて明確に書かれたものはないように見受けられる。<sup>(7)</sup>本稿では呉声西曲に見られる双関語の具体的な例を挙げ、また、比喻表現との比較を試みることにより、双関語の本質を明らかにしていきたい。

王運熙氏によると双関語とは「利用諧音作手段、一個詞語可同時関顧到兩種不同意義的詞語」であり、「同音異字之双関語」と「同音同字之双関語」の二つに分類される。<sup>(8)</sup>本稿では大枠ではこの二大分類に沿いながらも、比喻表現との比較において論ずることにより、その細部における問題点を整理していきたい。

## 二. 同音異字の双関語と比喻表現との関係

### (一) 同音異字の双関語の構造について

① 今夕已飲別、合会在何時。明灯照空局、悠然未有棋〔期〕。〈子夜歌〉<sup>(9)</sup>

今夕すでに飲<sup>(10)</sup>と別れ、会うは何れの時にぞ。明るき灯は空<sup>(11)</sup>しき局（碁盤）を照らし、悠然として未だ棋〔期〕あらず。

恋人との別れを歌ったものである。最後の「未有棋」はその前の「明灯照空局」（ともしびが何も置かれていない盤を照らす）が導き出す意義通りにとると「未有棋」（碁盤の上に碁石がない）という意味であるが、前半二句の恋人との別れを前提に改めて読むと、「未有期」（あなたに会えない）という意味が浮かび上がってくる。つまり、

「明灯照空局」は「棋」(碁石)の意を引き出すが、前半の「今夕已歎別、合会在何時」は「棋」と同音の「期」(会う)という意を引き出す。このように「棋」と「期」とを掛けたものは、他に「坐倚無精魂、使我生百慮。方局十七道、棋〔期〕会是何処」(読曲歌)「倚に坐して精魂なく、我をして百慮を生ましむ。方局に十七道ありて、棋〔期〕会するはこれ何れの処ぞ」などの二首にも見られる。

②聞歎遠行去、相送方山亭。風吹黄檗藩、惡聞苦籬〔離〕声。〔石城樂〕

歎が遠く行き去るを聞き、方山亭まで送る。風は黄檗の藩を吹き、苦き籬〔離〕の声を聞くを悪む。

キハダの木は苦みの強い木であることで知られていたもので、三句目の「黄檗藩」(キハダで作ったまがき)が引き出す意味としては、四句目の「苦籬声」は「苦いキハダでつくったまがきが風に吹かれて鳴る音」である。同時に、前半二句において相手との別れを歌っていることより、「籬」と同音の「離」という言葉が引き出され、「苦籬声」(辛い別れの声)という意義が浮かび上がってくる。「籬」と「離」との双関は、他に「執手与歎別、欲去情不忍。余光照已藩、坐見籬〔離〕日尽」(読曲歌)「手を執りて歎と別れ、ゆかんと欲すれども情は忍ばず。余光は己が藩を照らし、坐して見る、籬〔離〕の日の尽きるを」にも見られる。

③十期九不果、常抱懷恨生。然灯不下炷、有油〔由〕那得明。〔読曲歌〕

十期すに九は果たさず、常に恨みの生ずるを懐抱く。然るに灯に炷(灯心)を下さざれば、油〔由〕あれどもなんぞ明るきを得んや。

三句目の「然灯不下炷」(ランプに灯心を入れない)は次句の「有油那得明」(油があっても明るくなるはずがない)という意を引き出すが、前半二句の十回の会う約束の内九回も会えないので恨めしい、という部分を念頭に置くと、「油」と同音の「由」(理由、訳)という言葉が引き出され、「有由那得明」(会えない理由を言われたと

してもこの恨めしい気持ちは晴れるはずもない」というもう一つの意義が浮かんでくる。「油」と「由」との双関は、他に「非歎独慊慊、儂意亦驅驅。双灯俱時尽、奈許両無油〔由〕（読曲歌）」（歎独り慊慊たるにあらず、儂の意も亦た驅驅たり。双つの灯は俱に時に尽きる。いかんせん、両に油〔由〕無きを）などの二首にも見られる。

以上三首の「同音異字」の双関語の例を取り上げたが、ここで①の例を振り返ってみると、双関部分である「棋」（碁石）と「期」（会う）という言葉自体には意義的、論理的には何の関連性もなく、唯一同音であることによつて繋がりを持っている。そして、「明灯照空局」は「棋」の意を、「今夕已歎別、合会在何時」は「期」の字を、というように、文脈中には「棋」と「期」をそれぞれ引き出すヒントとなる句が存在する。結果として、「碁盤の上に碁石がない」ということと「あなたに会えない」という、意義的・論理的にはまったく結びつかない二つの文脈が一首の中で無理なく結び付けられている。他の二例に見られる「キハダのまがき」と「辛い別れ」、「油がある」と「理由がある」も、それぞれの二事は意義的には全く結びつかないが、音による関連とそれを導入する役目を果たす前後句のヒントによつて巧妙に結びつけられていることが分かる。

ここで、このような双関語を含んだ作品が歌として歌われたとき、聴者はどのような経過で双関語として認識するのかを考えてみる。①の歌の前半二句においては「今夕已歎別、合会在何時」というように恋人との別れが歌われ、三句目においては別れとは無関係な囲碁の碁盤が突如として登場する。この三句目からの流れとしては、四句目を耳にしたときは「未有棋」の意に解釈するのが自然であるが、第一、二句目に耳にした恋人との別れを念頭におけば、「未有期」の意義も脳裏に浮かび上がる。作者側の意図としては、「恋人と会えない」ことのほうが主意として描き出したい事柄であるはずなのに、わざわざ碁盤や碁石など、意義的・論理的には無関係の事象を持ち出し、主意の部分がストレートには伝わらないようになっている。聴く者は囲碁のほうに少し回り道してか

ら、音による連携によって「未有期」という主意にたどりつく構造である。このように、主意をわざと別の同音異字で包み隠し、聴者に謎解きめいた経過をへてから主意にたどりつかせるところが、双関技法の最大の特徴であるといえるであろう。しかし実際の双関語の認識の経過には、個人の主観によって多少の差が出るであろうとも思われる。「未有棋」と「未有期」の意義をほぼ同時に思い浮かべる聴者がいる可能性もあるし、先に「未有期」に解してから「未有棋」にたどりつく聴者もあるかもしれない。

## (二) 同音異字の双関語と比喩表現との違いについて

このように、異なる二者を音によって巧みに結び付けるのが双関語であるが、このような特性は双関語だけでなく、比喩表現にも見受けられるものである。ここでは双関語独自の特性を更に明確に理解するため、比喩の例を挙げて比較検討する。

### ④ 常慮有貳意、歡今果不齊。枯魚就濁水、長与清流乖。〈子夜歌〉

常に二意（ふたごころ）あるを慮るが、歡今果たして齊しからず。枯魚（干し魚）は濁水に就き、長く清流に乖く。

「枯魚」（干し魚）は男を、「濁水」は浮気相手の女、「清流」は自身を表し、<sup>(12)</sup> 枯魚が濁水に流れて清流には戻らぬ様を以って、男が他の女に迷って自分の所へは戻らぬ様を喩えている。

### ⑤ 黄葛結蒙籠、生在洛溪辺。花落逐水去、何當順流還、還亦不復鮮。〈前溪歌〉

黄葛は結して蒙籠（はびこり茂る）となり、洛溪の辺に生ず。花は落ちて水を逐いてゆけば、何ぞはた流れに順じて還らんや。還れども、亦た復には鮮からず。

黄クズの生い茂る様子は青春盛りの女性の美しさを喩えている。散った花は一度水の中に落ちれば、そのまま流されていく。たとえ水が逆流してもどってきたとしても、元の鮮やかさを失うことは免れ得ない。このことは、人間の青春も水に流れる花びらと同じであつというまに過ぎ去り、人は老いれば青春のはつらつさを取り戻すことは不可能である、ということ喩えている。

上記の二例に見られるように、魚や花などの事物と人間とは、それぞれが表す行為、現象という、意義的・論理的側面から結びついているのが分かる。この点が前に挙げた双関語と構造を大きく異にする点である。つまり、文脈の意義や論理の類似性によって二事を結び付けるのが比喻であり、字音の類似性によって二事を結び付けるのが双関語なのである。

しかし、前に挙げた①②③の双関語の例のように、相對する二事が意義的には全く関連せずに音のみによって結びつく、というものは一部の作品のみに見られ、実際には双関語は比喻表現と複雑に絡み合つて出現するものが多い。次節ではそのような、比喻表現と双関語が相俟つて使用されている例について論じる。

### (三) 同音異字の双関語と比喻表現との関連性について

⑥ 始欲識郎時、両心望如一。理絲〔思〕入残機、何悟不成匹。<sup>(13)</sup> 〈子夜歌〉

始め郎を識りし時、両心一つの如きを望む。絲〔思〕を理して残いし機に入るも、何ぞ匹を成さざるを悟らんや。

「理絲入残機、何悟不成匹」(糸を織ろうとして壊れた機織り機に糸をかけても、まともな反物にはならないことさえ分かっていたいなかったのだ)は、表面的には機織りの失敗を表しているが、前半二句に見られる相手と親しく

なりたい、という強い感情の表現は、「絲」と同音の「思」の意を導き出し、「あなたをいくら思っても、望むような結果が得られない」という裏の意味が浮かんでくる。「絲」と「思」との双関は非常に多く見られ、他に「婉變不終夕、一別周年期。桑蚕不作繭、晝夜長懸絲〔思〕（七日夜女歌）」（婉變たれども終夕せず、一たび別れるれば年周りてから期す。桑蚕は繭を作らず、晝夜に長く絲〔思〕を懸く）などの八首にも見られる。

⑦我念歆的、子行由豫情。霧露隱芙蓉、見蓮〔憐〕不分明。（子夜歌）

我が歆を念うは的的（あきらか）たれども、子の行うは由豫（猶予）の情。霧露は芙蓉を隠し、蓮〔憐〕を見れども分明せず。

「霧露隱芙蓉」は「見蓮不分明」（ハスの実を探してもはっきり見えない）を導き出すが、前半の恋人がぐずぐずしてはつきりしない様を語る部分より、「蓮」（ハスの実）と同音の「憐」（恋人）という言葉が引き出される。結果として、「見憐不分明」（あなたを見てもその態度ははっきりしない）という意味が浮かび上がる。「蓮」と「憐」との双関は呉声西曲中において最も多く、他にも「罷去四五年、相見論故情。殺荷不斷藕、蓮〔憐〕心已復生（読曲歌）」（ゆくを罷めて四五年し、相見えて故情を論ず。荷を殺せども藕を断たざれば、蓮〔憐〕心已に復た生ず）などの十七首の中に見られる。

以上二例の内、⑥の双関語の部分、つまり「絲」と「思」は音による関連性をもつのみで意義的には全く結びつかないが、文脈全体としては、機織りの失敗という事象は相手へ思いが実らぬことを喩えている。同様に、⑦の「蓮」と「憐」も、意義的には結びつかず音による関連性を持つのみであるが、「蓮の実がみつからない」という事象は「あなたの態度ははっきりしない」ことを喩えている。第一節において挙げた①～③においては、作品中に歌われた異なる二事の共通点は「同音である」ということのみであったが、上述の⑥と⑦においては音によ

る繋がりに加えて、二つの文脈がそれぞれ表す事象自体も、意義的・論理的な類似性によって関連性をもっている。つまり、比喻表現と双関語はその構造自体は異なるものであるが、実際の使用の際には、双関語は比喻表現の中に組み込まれて使用されることがあることが分かる。

次に挙げる例も双関語が比喻表現の中に組み込まれている例であるが、⑥⑦とは異なり、双関語を引き出すヒントとなる句が存在しないタイプのものである。

⑧偽蚕化作繭、爛熳不成絲〔思〕。徒勞無所獲、養蚕持底為。〔採桑度〕

偽蚕（壊死した蚕）化して繭を作る。爛熳（色鮮やかで美しい）たれども絲〔思〕を成さず。徒勞して獲る所なく、蚕を養うは底なを持つての為ぞ。

この歌にも⑥と同様に「絲」と「思」の双関が見られ、「不成絲」（まともな糸にはならない）は「不成思」（あなたへの思いは実らない）、つまり恋の失敗を意味する。「絲」と「思」との意を異にする二事は音の同一性によって結び付けられていると同時に、「糸にならないさま」は「思いが実らないさま」を喩えている。しかし、この歌は⑥とは異なり、隠された意味である「思」を引き出す直接のヒントとなる句が見られない。

⑨朝登涼台上、夕宿蘭池裏。乗月採芙蓉、夜夜得蓮〔憐〕子。〔子夜夏歌〕

朝に涼み台の上に登り、夕に蘭池の裏に宿る。月に乗じて芙蓉を採り、夜な夜な蓮〔憐〕子を得る。

この歌も双関語を引き出すヒントとなる句が見られないが、「蓮」と「憐」を掛けていることに気がつけば、「得蓮子」（ハスの実を得る）から「得憐子」（恋人を得る）という別の意味が浮かび上がる。「蓮」と「憐」とは音の同一性によって結びつくと同時に、ハスの実を得る事象自体も恋人を得る様を喩えている。

上記の⑥⑦と⑧⑨とを比べて分かる通り、双関語を使用した歌には、裏の意味を引き出すヒントとなる句が存



在するものと無いものがある。一方、「絲(思)」「蓮(憐)」の双関語は、呉声西曲に見られる使用首数がかなり多いことから、「絲↓思」「蓮↓憐」の連想は至極自然な、一般的なものであることが分かる。また、双関語「蓮(憐)」においては呉声西曲にその使用が見られる十八首の内の八首は、裏の意味を導くヒントとなる句のないタイプである。このことから、「蓮(憐)」などの双関語はヒントとなる句が存在せずとも、聴者はひとたび耳にするだけで裏の意味を思い浮かべることができるほど一般的であったといえる。日本の和歌でも「松(待つ)」「春(張る)」を掛けるのが非常にポピュラーであることに類似するとも言えるだろう。

ここで更に、第二節において取り上げた比喩表現のみを使用した例(④⑤)と、双関語が比喩表現の中に組み込まれている例(⑧⑨)とを比較してみる。⑤は④の比喩の例とは異なり、人間のことを喩えているという直接のヒントとなる句が存在しないので、聴者によってはこの歌は花のことを歌ったものであると解釈し、花の水に流れる様子でもって人間の人生を喩えているとは気がつかない、あるいは気付きにくい可能性もある。一方、双関語を含む⑧⑨においては、双関語へ導く明確なヒントとなる句は存在しないものの、一般的な共通認識によってもう一つの同音の言葉を思い浮かべることができさえすれば、異なる二事を結び付ける連想作業は迅速且つ的確に行われる。つまり、双関語と比喩とは「相対する異なる二者を結び付ける」という点で近似する技法であるが、二事を結び付ける条件が「字音の類似性」であるか、あるいは「文脈の意義や論理の類似性」であるか、という点において大きく異なる。そして、このような二事を連携させる効果の高さにおいて比較すれば、双関語は比喩よりも更に的確さと迅速さを併せ持つ技巧であると言えよう。そして、双関語が比喩表現の中に組み込まれている作品の中では、双関語は比喩の弱点を補い、二者の連携をより素早く的確に行う効果を発揮するのであ

る。このように、音の同一性によって異なる二事を瞬時に結び付けるといふ特性をもつ技巧であったからこそ、楽曲を伴って耳で聞くものであった民間楽府において成熟し、多量に使用されるようになったとも言えるであろう。

### 三 同音同字の双関語と比喻表現との関係

前章においては、双関語には音の類似性のみで結びついているものと、音の類似性のみでなく、文脈の意義的論理的類似性においても結びついているもの、つまり比喻表現の中に組み込まれて使用されているものがあることが分かった。この章では「同音同字」の双関語の内、音の類似性のみで結びついているものを先に取り上げて論じ、双関語の特性について更に明らかにしていきたい。

#### (一) 同音同字の双関語の構造について

⑩ 自從別歎後、歎音不絶響。黄蘗向春生、苦心随日長。<sup>(14)</sup>〈子夜春歌〉

歎なげと別れて後、歎なげきの音絶えずして響く。黄蘗きはだは春に向かいて生じ、苦心きしん（芯・気持ち）は日に随まいて長ず。

「黄蘗」（苦みの多い木）は「苦心随日長」（苦い芯が日に日に増す）の意を引き出すが、前半の別れの場面からは「苦心随日長」（辛い気持ちは日に日に増すばかり）の意が浮かび上がってくる。つまり植物の「苦心」と人の「苦心」とが双関語となっている。このような双関語は他に「自從別郎来、何日不咨嗟。黄蘗鬱成林、当奈苦心多」（子夜歌）（郎らに別れしより、何れの日にか咨嗟しさせざる。黄蘗は鬱として林を成す。いかんせん、苦くき心の多おほきを）

にも見られる。

⑪ 自從別郎後、臥宿頭不舉。飛龍落葉店、骨出只為汝。〔読曲歌〕

郎きみに別れし後、臥ふし宿りて頭を挙げず。飛龍は葉店に落ち、(龍・我)骨出づるはただ汝のため。

「飛龍落葉店」は「(龍)骨出」(龍骨葉が売りに出される)を連想させると同時に、前半二句に歌われる恋人との別れより、「骨」は男を思う女自身のものであり、「(我)骨出只為汝」(わたしがやせ衰えたのはあなたのためだ)という意味が浮かび上がる。

⑩の「キハダの芯の苦さ」と「辛い気持ち」は共に同音同字の「苦心」で表されるが、意義的には全く異なる。⑪の龍骨葉とやせ衰える女性も、論理的には全く結びつかないものである。よって、「同音同字」の「同字」とは、「字形」の同一を指すのみであって、その「字義」は全く異なるものであると言える。そして、「同音同字」の双関語は、音だけでなく「字形」も同一のものを使用する、という点で「同音異字」の双関語とは異なるが、二つの意義の異なる言葉を音の同一性によって結び付けるといふ点では、その構造は同じである。また、上記の二首を比喻表現との比較において見ても、キハダの苦さが増すことと人の辛い気持ちが増すこと、また、龍骨葉が売りに出されることと女性がやせ衰えることとは意義的・論理的には何の関係もなく、二つの異なる事象は字音の共通性のみによって結びついていることが分かる。

## (二) 同音同字の双関語と比喻表現との関連性について

次に挙げる作品は、「同音同字(異義)」の双関語が、比喻表現に組み込まれている例である。

⑫ 見娘喜容媚、願得結金蘭。空織無経緯、求匹理自難。〔子夜歌〕

娘に見えて容の媚なるを喜び、金蘭を結ぶを得るを願う。空織りにて経緯（縦糸と横糸）なければ、匹（反物・つれあい）を求むれど理むるは難し。

「空織無経緯」（空織りで縦糸も横糸もない）より、「求匹理自難」の「匹」は「布匹」（織物）の意味にとれる。しかし、前半に恋人を求める気持ちを読んでいるので、「布匹」の他に「匹偶」（つれあい）の意味が引き出される。結果として、「求匹理自難」からは「相手と仲良くなろうと思っても今の状況からいつて難しい」の意義が浮かび上がってくる。「布匹」と「匹偶」との双関は他に「隠機倚不織、尋得爛慢絲。成匹郎莫断、憶儂経絞時（青陽度）」（機倚を隠して織らず、爛慢たる絲を尋ね得る。匹を成すに郎よ断つこと莫れ。儂の経を絞むる時を憶え）などの四首にも見られる。

⑬ 音信闊弦朔、方悟千里遙。朝霜語白日、知我為飲消。〈読曲歌〉

音信闊はるかなること弦朔（数ヶ月）。まさに悟る千里の遙かなるを。朝霜は白日に語る。「我の飲が為に消ゆる（融ける・痩せる）を知れ」と。

「朝霜語白日」より、「消」からは「消融」（霜が融ける）の意が引き出される。しかし、前半に恋人が遠くへ去っていったことが描かれていることから、「消」は「消瘦」、つまり心労で痩せること、つまり「私がやつれたのは遠くへ去ってしまったあなたのせい」という意が浮かび上がる。

⑫の「反物」「つれあい」という全く異なる二つの意義は「匹」という字音・字形の同一性によって結びついていると同時に、「反物を求めるさま」は「恋人を求めるさま」を喩えている。⑬の「融ける」と「痩せる」も字義レベルでは直接には結びつかないが、「消」という字の同一性によって結びつき、同時に「太陽によって霜が融けるさま」は「男を思って女がやせ衰えるさま」を喩えている。つまり、上記二例は⑩⑪とは多少異なり、相対す

る二事は字音や字形の同一性だけでなく、文脈の意義的・論理的類似性によって結びついている。

### (三) 同音同字の双関語と比喩表現との相異について

第一、二節において論じたように、「同音同字」の双関語の構造は、「同音異義」である二つの言葉の双関であるという点で、その基本構造は「同音異字」の双関語の構造と変わりはない。そして、「同音異字」の双関と同様に、比喩表現に組み込まれた形での使用例が多く見られる。ここで問題となるのは、王運熙氏の分類においては「同音同字」の双関語に分類されているが、実際には比喩表現と見なした方が適切であろうと思われる例である。

#### ⑭女蘿自微薄、寄託長松表。何惜負霜死、貴得相纏饒。〈襄陽樂〉

女蘿（メカズラ）は自ずから微薄なりて、長松の表に寄託する。何ぞ霜に負けて死ぬを惜しまんや。相纏饒まつわるを得たるを貴ぶ。

「貴得相纏饒」は、木の周りに纏わりつくことができるだけでもありがたい、という、メカズラの気持ちを描いていると同時に、男性のそばにすることができてうれしい、という女性の気持ちを喩えている。

#### ⑮湖中百種鳥、半雌半是雄。鴛鴦逐野鴨、恐懼不成双。〈夜黄〉

湖中に百種の鳥おりて、半ば雌にて半ば雄なり。鴛鴦（オシドリ）が野鴨を逐うは、双を成せざるを恐れるがためなり。

「恐懼不成双」は、相手が見つからないのを恐れるオシドリの気持ちを語ると同時に、人間の男女が、相手が見つからないのを恐れる気持ちを喩えている。

ここで第二章第二節で論じた、同音異字の双関語と比喩との構造の違いを思い返してみると、文脈の意義や論

理の類似性で異なる二事を結び付けるのは比喩であり、字音の類似性で異なる二事を結び付けるのが双関語であった。⑭の「纏饒」という動作は、主体が植物か人間かという違いはあるものの、「纏饒」という動作の意味自体には変わりはない。⑮の「成双」も、主体が鳥か人間かに変わるだけで、ペアになる、という意味には変わりはない。つまりここで使われている「纏饒」「成双」は、「同音同字」ではあっても、「同音異義」であるとは言えない。この点からすると、この二首に見られる「纏饒」「成双」は双関語特有の機能を果たしているとはいえず、寧ろ比喩表現であると思なした方が適切であろう。このように、たとえ「同音同字」という条件を満たしてはいても、結び付けられる二つの言葉の意義が近すぎると、双関語の機能は成立しないことが分かる。双関語を成立させる条件は単に「同音」である、ということだけではなく、「異義」であること、二つの言葉の意義がかけ離れている、ということが重要な条件であると言えるだろう。

#### 四. まとめ

双関語と比喩とは、「二つの相対する事象を結び付ける」という点においては極めて似通った技法であると言えるが、二事を結び付ける条件が「字音の類似性」であるか、あるいは「文脈の意義や論理の類似性」であるか、という点において大きく異なる。しかし、実際には双関語は比喩表現の中に組み込まれて使用されていることが多く、裏の意味を導くヒントとなるの句のない場合にはその喩えられている主意に気付きにくい可能性のある比喩表現の欠点を補い、双関語は音の喚起によって瞬時に且つ的確に二つの現象を結び付ける働きをする。そして、双関語と比喩はその基本構造において明確な違いを持ち、双関語を成立させる条件は単に「同音」である、ということだけではなく、「異義」であること、二つの言葉の意義がかけ離れている、ということが重要な条件となっ

ている。

筆者はここ数年「中国古代歌謡における形式的特徴」を大きなテーマとし、楽曲を伴って歌われた歌謡である「民間楽府」に見られる様々な特徴について論じてきた<sup>(15)</sup>。楽府詩が演奏されていた当時の楽譜は早期に散逸し、今となつてはそのメロディーやリズムは知る由もないが、その文字として残された作品の端々には楽曲を伴つたことを示す様々な特徴が残されている。今回取り上げた「双関語」も、楽府は本来耳で聞くものであった、ということを示す一つの大きな特徴であると言えるであろう。

#### 注

- (1) 「楽府」の定義や「民間楽府」の範囲については、拙稿「民間楽府における表現形式とその機能について——頂真格を中心に——」(お茶の水女子大学中国文学会報 第二十三号二〇〇四年四月)を参照されたい。
- (2) 褚斌杰著『中国古代文体学』(台湾・学生書局 民国八十年) 一一二頁
- (3) 『中国古代文体学』一二五頁
- (4) 王運熙著『六朝樂府與民歌』(台湾・新文豊 民国七十一年) 所集
- (5) 胡紅波著「論歌謠之『双関』義」(『成功大學學報』第二二期台湾・成功大學 民國六十六年五月)
- (6) 黄慶萱著『修辭学』(台湾・三民書局 民國五十四年) 傅隸僕著『修辭学』(台湾・正中書局 民國六十七年)
- (7) 分野は異なるが、日本文学における掛詞の構造について論じた良作として、村島祥子氏の「掛詞——構造の分析と形態の分類——」(『日本文学誌要』第五十七号 一九九八年三月)、また、時枝誠記氏の「懸詞による美的表現」(『国語学原論』所集 昭和十六年 岩波書店)があり、筆者は本稿執筆の際にこの二篇の論文より大きな示唆を得た。
- (8) 『六朝樂府與民歌』一二二頁
- (9) 原文は『樂府詩集』(宋・郭茂倩編撰)に従う。文中「」は同音異字の双関語を示す。

- (10) 呉声西曲には恋人を呼ぶ言葉として「歛」「郎」が度々出現する。
- (11) 訳出に際しては黄陶陶著「南北朝楽府民歌的修辞芸術(上)」(『語文学報』第十期 台湾・新竹師範学院 民国九十二年一月)、余貫英著『楽府詩選』(台湾・華正書局 民国七十二年)、小尾郊一・岡村貞雄訳註『古楽府』(東海大学出版会 一九八〇年二月)などに見られる注釈を参考にした。訓読文中の「」は同音異字の双関語を、( ) は語訳を示す。
- (12) 余貫英氏訳注に従う。「魚喻男子、濁水喻其他女子、清流自喻」(余貫英著『楽府詩選』尚、『楽府詩集』「雜曲歌辞」には「枯魚過河泣」という干し魚の悲哀を歌った歌が見られる。
- (13) 「匹」の字にも双関語(同音同字)がみられるが、これについては次章において詳しく取り上げる。
- (14) 原文中の傍線は同音同字の双関語を示す。
- (15) 民間楽府に見られる「頂真格」については前掲の拙稿「民間楽府における表現形式とその機能について―頂真格を中心に―」(『人間文化論叢』第七卷 二〇〇四年三月 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)を参照されたい。

(よしだ ふみこ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学 台湾稻江科技管理学院専任講師)